

---

# 廻れ Girls!

しろがー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

廻れ Girls！

### 【Nコード】

N9305K

### 【作者名】

しろがー

### 【あらすじ】

逢坂可奈は自称クールガール。今日も幼なじみ兼親友兼お邪魔虫の野崎華に誘われ、変なことに付き合わされる。で、今回は……

「鉄棒？」

ちよ、私たち花も恥じらう女の子なんですけどーッ！

鉄棒を回れ、世界を廻せ！  
Girlsたちの青春コメディー！

## 集えGirls!

「……鉄棒部う？」

逢坂可奈は直前に耳にした言葉を、いささか呆れた口調で反芻した。

「剣道部じゃなくて？」

「そう、鉄棒部！」

返ってくるのは、明るく快活な声。怪訝そうな表情で繰り返した可奈とは正反対。

可奈の正面の席に座り、柔和な笑顔を浮かべている人物 野崎  
華は本日三度目となる問題の単語を口にした。

「鉄棒部、です！」

可奈は椅子を引き、目の前でニッコニコしている幼稚園来の幼なじみと距離をとった。呆然としたその顔を見つめる。

何言っちゃってんの、こいつ。馬鹿なの、死ぬの？

とまではいかないが、可奈の視線には端的にそんなニュアンスの意味が籠っていた。

「ああ！ 馬鹿にしてるでしょ、可奈！ あたしは真剣そのものだよー！」

幼なじみの叱責を受け、ああ、と。可奈は回想する。そういえばそうだった。この子は昔ッから人と少し感覚がズレているんだっただ。

例その一。アテネオリンピックで北島康介が金メダルをとったとき、あまりに凄い凄い言い出すものだから、水泳でも始めるのかなと思いきや、彼女は温泉旅行に出掛けた。

(いわく、『水がとーっても気持ち良さそうだったから』)

例その二。全国クイズ選手権たるものでエキサイトしていたその次の朝、彼女は屈託ない笑顔とともに、昔流行った『へえボタン』を持ってきて、一日中押していた。

(いわく、『ボタンを押す快感にはまったから、皆きつと頑張ってるんだろっなあ』)

そう。華は“変人”なのである。着眼点がズレている、ともいう。それはかれこれ十三年間、学校どころかクラスをとにもするという偉業(単なる腐れ縁)を成し遂げた自分が1番よくわかっている。きつと今回も上記の類のものだろう。

「で、今回は何に感化されたわけ？」

一応聞いてあげるといっ己の優しさに酔いながら可奈が尋ねると、

ニマーツ、と。華は本当にホンツトウに嬉しそうに微笑んだ。

「内村航平」

ほら、また始まったよ。可奈は自らの机に突っ伏した。

「もしもし。可奈あ。聞いてますかあ？」

「効いてますよ」

むくり、と起き上がる。眼前には再度広がる華の笑顔。

「ね、ね。一緒にやるうよ。あたしさ、とっても回りたいんだ。こ  
う、ぐるぐるーって」

これは一体何度目だろう。そしてこの台詞を言うのも何度目だろ  
う。

「嫌です」

途端に華の顔は悲痛に歪んだ。

「なんで？ 可奈はあの回転を見て回りたいてって思わなかったの？  
あのしなりを見て、憧れはしなかったの？」

「んなものするの、あんただけでしょ」

「いんや、したにちがない。可奈はツンデレだから、きつと  
素直に言えないに決まってる」

ツンデレと称されたことは横に置いておくとして、やーっぱり華のセンスは人とズレている。あれ見たら普通の女の子は『内村様ーん!』とか言うでしょ。なんだい、回転したいって。あれと同じことしたいなら、陸上部でも新体操部でも入れればいいじゃないの。その旨を伝えると、華はフッフッフ、と含み笑い。

「あの鉄臭いただの棒でぐるぐるするから意味があるんだよ。目標はねえ……」

駄目だこりゃ。華ワールド展開だ。こうなった華は止まらない。

「大車輪!」

豪語し、華は可奈の手を握った。

「あなたもきいーっと回りたくなるでしょう! さあ、我らの園へ!」

「嫌」

一年の夏休みも終わり、学校全体がなんとなく弛緩しているときのことだった。

「本当にやるのー?」

放課後になり、本当にやる気満々の体操着姿で目の前に立ち塞がった華に連れられ、可奈は鉄棒の前に立った。そして、文句をたらたら。

そう、そもそも自分は花も恥じらう女子高生なるものである。何故鉄棒なんかしなくちゃいけないんだ。懸垂一回すら丁重にお断りするわ。

「するの」

が、親友（華いわく。可奈は腐れ縁によるもの、と断言する）である華は、意気揚々と荷物も砂場に放り投げた。

「あーあー、女の子でしょ。もうちょい優雅にさあ」

「いんや。今のあたしは女の子じゃないよ、可奈。さしずめ、テツバーだね」

豊満な胸を張りながら、華は自信満々に言う。可奈はその意味を考え、首を傾げた。

「テツバー、てつばー、てつばあ……ああ、」

t e t s u b e r ね。鉄棒を擦っただけ。

「なんでも e r つけりゃそれになるわけじゃないよ」

「そう？ フィーリングはそれっぽいじゃん」

両手両足を一通りぶらぶらとさせた後、華はガシツと力強く鉄棒を掴んだ。不敵に笑う。



「まずはわたくしが見本を見せて差し上げましょう。可奈はあたしの後ろをただのんびりについてくるがよい」

「はいはい」

冷たく返す可奈の前で、華はふんっ、と気合い注入。そして重いつきり地を蹴りあげた。どうやら逆上がりから入るつもりらしい。結構綺麗なフォーム。おお、と可奈は感嘆の声をあげる。

「おっ、りゃあああっ!」

届いてない。明らかにその両足は回るために届かせなければならぬ地点まで達していなかった。プルプル震える両足をたっぷり十秒ほど伸ばしたり、振ったりした後、

「んげ」

という悲鳴とともに華は地に落ちた。

そのまましばらく砂場に大の字で寝転ぶ華のもとに、可奈は寄り添っていった。

「気は済んだ?」

「まだ」

その瞳に強い意志を宿した状態で、華は立ち上がる。鉄棒を掴む。地面を蹴る。届かず、静止する。落ちる。可奈は小さくため息をついた。

華は昔からこうだった。気分屋で、色々なことに手を出すぐせに、

目標に達するまでは決して諦めない。しかし、それでできることもあれば、できないことだって必ずある。そんな時のストッパーとして、自分は機能していた。過程を見て、無理だと判断したら、止める。止まらない時は無視する。元来寂しがりやな華はそうなる諦めがつくのだ。今回もそれだ。きっと彼女は自分が止めない限り、あきらめない。

五回目の不時着を成功させたとき、可奈は口を開いた。

「もう無理だつてば。私たち女の子だよ。元々腕力なんかないんだからさ。大車輪なんて遠すぎるよ」

腰を打ったのか、顔をしかめている華はそれを聞いて眉をひそめた。

「女の子だからっていうのは心外だよ。可奈、今はジェンダフリーの時代なの。男の子だって裁縫するご時世なんだから」

「……むっ」

駄目だ。いつもはへらへらしてる柔女のくせに、こうなると華は強い。もっと別のところでその熱意を生かしな、っていつもいつてるのに。例えば勉強とか。

可奈が華のために頭を割いていると、華は腰を摩りながら立ち上がり、言った。

「さあ、次は可奈の番だよ。くるりつと回ってみせなさい」

「はい？」

ほらほら、と華は可奈を鉄棒の前に押し出し、回るよう促す。

「大体私制服だし。スカート履いてるんだよ？ あんた私にパンツ見せびらかせるって？」

「ふむふむ。残念ながらあたしからすれば、可奈のことは御見通しなのだよ。パターンの今日は……水玉とみた」

「へッ……!?!」

ちらつ、と可奈は今日も模様を確認した。

……水玉。

「じ、この、へへへんたいッ!」

「うっしっし。可奈のことなら全て御見通しさ。なんなら今日の朝ごはんも当てて見せましょう……って、話がそれちゃったじゃん。さあ、さあ、くるりっ!」

はあはあ言いながら、ニヤニヤしながら、指を不規則に動かしながら、近づいてくる華はもはや変態以外の何者でもない。こうなったらこの子はしつこいんだよなあ、と可奈は長あーいたため息を一回、そして荷物を華のその上に放り投げた。

「一回だけだからね」

「あーん。流石可奈！ その鞭と飴のバランスがたまんなあ!」

……変態な友人は置いといて。

可奈は目の前に堂々と佇む鉄の棒を眺めた。思わず息を飲む。何

故だかそんなただの鉄の棒から覇気のようなものを感じたからだ。が、さつさと帰りたい手前、退くわけにもいかない。今日は一直線に帰って『どうぶつの森』をやり倒すつもりだったのだ。まったくよくもまあ邪魔してくれたものである。

「よし！」

たった一回だ。可奈は鉄棒を掴み、大きく息を吸う。そして、

「だりゃっ！」

と気合い一発。砂場をえぐるような勢いの蹴りを放ち、足を一気に押し上げた。景色が一変する。

回る。視界が。世界が。

体が風を切った、地球の自転から自分だけ外れたような気がした、刹那の間今までとは違った世界が見えた

90度、120度、150度、180度

「ええ！？」

親友の驚愕の台詞を働かない頭が感知し、脳内で反芻する。

あ、私今回ってるんだ。

「ええ！？」

自分の眼前の景色が再びグラウンドを臨んでいるのを感じ、可奈も驚愕の言葉を吐いた。

360度

可奈はいつもより高い位置から世界を眺めていた。

「で、できちゃった」

彼女は八八、と力無く笑った。

「すごい、すごいよ可奈！」

夕焼けに染まった空の下、帰路につくまでの間、華はずーっとつぶやいていた。独り言じゃなく、確かに自分に向けられたもので、常に反応を伺ってくるものだから、たちが悪い。

「もう、しつこいなあ。女の子だって逆上がりくらいならそう難しくくないでしょう」

「あたしはできなかつたもーん」

機嫌を損ねたのか、華はぷうーとその頬を膨らませた。不細工がやったら間違いないく殺気の嵐だが、残念、華は一般的にかわいいといわれる人種（女の子リサーチより）だ。

そんな彼女とともにいる可奈はそれでもないらしい（女の子リサーチより）。告白どころかラブレターすらもらったことがない。なんでも顔はいいのに、サバサバした性格が災いしているとかなんとか（女の子以下略）。

だが、別に興味もなかった。華みたいに皆から好き好き言われてもねー。最終的に一人に愛してもらえりゃいや。楽観的に考え、腕を頭の後ろで組む。そこでやっと、華がじっと見つめていたこと

に気付いた。

「なに？」

「いやさー。可奈ってやっぱかわいいなって。モテないのがホント不思議」

言いながら見つめるその眼差しは妙に熱っぽい。もてもてのくせに彼氏ゼロの華が存在するのは、これがあるから。まったく。

「まーね」

「う、冷たい。こんなかあいー女の子が近くににいるんだから、テンションマックスになってもおかしくないのにー」

「ま、私、女の子だし」

しきりに腕を組もうとする華の顔面をガツ、と掴み、そのまま引き離す。むきになって闇雲に腕を振り回すガキっぽい華を、可奈は一瞥した。

「あんただってモテるんだから、さっさと男の一人でもゲットしてきなさいよ。まったく」

「だってさー」

華は可奈のアイアンクローに別に堪えた様子もなく、ケロツとした顔で言った。

「今が楽しいんだもん。別にいらないつしょ」

晴れやかな笑顔。まあ、確かにそうかもしれない。男の子の魅力をまだ感じないほどに幼い華だからかもしれないが、きつと彼女からすればこうやって笑い合っていたほうが好きなのだ。そこは確かに頷ける。

「だからって、引っ付くな」

「うへへ」

「そんなこといって抱き着かれるの好きなくせにい。このシンデレ  
が」

うりうり、と華は可奈の頬に指を押し付けた。ピキ、と可奈の額に青筋が走る。

「ああなたがそんなだからねえ。私は苦勞するの」

「この学校で一番アツアツなカップルは誰ですかあ？」

後日。可奈が昨夜のゲームで熱中すぎたため、寝不足から惰眠を貪っていると、すぐ近くから女子のキャピキャピした話し声が聞こえてきた。この声の大きさ、場所、高さ。明らかに自分に聞かせようとしている。

「ハナカナー！」

案の定、後ろに音譜マークの一つや二つ付属しそうな軽快な調子で他の女子数名が答えた。今のところはまだ睡眠欲のほうに勝っているから、黙つといてやろう。だが、一通り笑った後、しいーんと静まり返ることから、確実に自分の反応を待っている様子だった。悪いが、まだ眠い。

「ハナカナー！！」

ZZZ……。

「ハナカナー！！」

ZZZ。

「ハナカ」

「うるさい」

本っ当にうるさい。可奈は寝起きそのままの不機嫌フェイスですぐ傍らに集う女子の集団を睨みつける。

「何度もいつてるでしょ。私と可奈はただの友達」

「はい、ここ重要！」と、一人が言えば、

「テストに出るぞー」と、他の女子生徒も悪ノリして言う。流石の可奈もプツンときた。



「しつこいつて言ってるでしょーがあ！」

キヤー、と可奈が起き上がると同時に蜘蛛の子を散らすかのように散開する女子ども。恐怖の悲鳴というより、歓喜の歓声。こうなることを楽しんでいるのは丸わかりだが、可奈の性分として、しつこいのは嫌いだ。だから、無視などせず、全力で仕留める。だからからかわれるんだよ、とは誰も忠告してあげてはいなかった。

一通り制裁を加え、陽気に笑うMっ娘たちの前に立ち塞がり、可奈は言った。

「私と華は単なる友達。次に変なこといたら、あんたらねえ」

「え？」

パサリ、と背後からはスーパールの袋が落ちた音。

「あの熱い夜は嘘だったの!？」

華ああああッ！ あんたまで悪ノリすんじゃないなああいつ！

可奈は内心あらん限りの大声で怒鳴った。

「あたしとは遊びだったのねえええッ！」

絶叫しながら教室を飛び出していく、華。その背を見送りながら、可奈はため息をついた。過去、あの馬鹿はこういうノリで自分が追いかけなかったがために、屋上で飛び降りかけたことがあった（勿論、華からすれば冗談）。それをガチで止めに入った可奈は、放っておくことができない。

「華の馬鹿ぁ！」

そうやって律義に追い掛けるから、またしても皆にからかわれる。もはや可奈のツンデレは公称と化していた。

「今日もするのー？」

相変わらず鉄棒の前に立つ変人の姿を見ながら、可奈は何度目かもうわからない呆れのため息をついた。

これでもう一週間が経つ。休日を除いて華は毎日ここでもくるくるやっていた。そんな彼女に毎回付き合っただけの可奈だったが、段々まどろみはお人よしなのかしら、と憂いて、可奈は砂場の隅に置いてあるベンチに腰かけた。

くるり、ずしゃ。くるり、ずしゃ。定期的に繰り返されるシーン、リズム。よくもまあそこまで忠実に再現できるものだ。そう思っただけだ。なんとなく眺めているだけの可奈だったが、段々まどろみはじめた。そうだ。いつもこの時間に屋っていたゲームの時間が夜に回されるから、必然的に眠くなるんだ。一度、目をこすってみるも、一向に目は開こうとはしてくれない。ついに睡眠欲に屈しようかというとき、背後から声がかかった。

「へえ。毎日鉄棒で遊んでるってのは、野崎さん達だったの？」

「んあ？」

重いつきり寝起きのそれで返事をした可奈。そして、その声の主を振り返って確認すると、

「ふえ？」

今まで糸のようだった目が、今度は点になった。

「か、片原……くん？」

「うん。おはよ」

……ぎゅ

ぎゃあああああ！？

可奈は心の中でそれはもう、日本サッカーチームが相手チームにゴールを決められたとき弟の発するものを遥かに凌ぐ大声で絶叫した。い、今自分なんて言った？ 「んあ？」って？ 「ふえ？」って？ で、片原くんが「おはよ」って？ ぐわあああ！ 身の破滅だあ。一生の不覚だあ。

「大丈夫、逢坂さん。顔が真っ赤だけど？」

「あ、ああ、はい。だ、大丈夫ですえ」

「ですえ？」

もうダメです。もうこの際、埋めてください。誰の目にも届かないところに置いてください。

可奈は自身の頭を抱え、ぶるぶると震えだした。なんてことだ。よりにもよって片原修吾くんその人に声をかけられ、過剰な反応をしてしまうとは。しかし、頭はクールダウンしてくれない。昇り始めた夕日にも負けないほどに真っ赤となった可奈はふらふらと揺れ動く。

「……カッコイイよね」

「え？」

何が？ ただ揺れてるだけの自分のこと？ その言葉の目標が自分ではないことに気付くのにヒートアップした頭でたっぷり数十秒かかった。やっと、彼の視線の先に何かがあるのかを察した。

「え？」

今度は確認のための、え、である。彼の視界には鉄棒を一生懸命回ろうとしている体操着姿の変人しか映っていないはず。

「……え？」

三つ目のえ、は呆然とする口から無意識下のうちに出たものだった。

「頑張ってる人ってさ。見ててカッコイイよね。見ててめっちゃ自分もあなりたいと思う」

体操着姿で鉄棒とフアイトする人に？ 落ち着け、自分。可奈はやっとこ現状を確認するまで自分の頭を冷やすことに成功した。そこで初めて片原くんの姿が陸上競技のユニフォーム姿なんだと気付

いた。今部活中なのか、引き締まった肉体は汗で輝いて見えた。

「ねえ、逢坂さん。野崎さんはなんであんなことしてるの？」

「え、……えっと……」

太陽と負けずとも劣らない輝きを持つスマイルを受け、可奈は固まった。言葉が緊張のあまり出てこないのと、実際なんて答えたらいいのかわからないとで、

「き、気まぐれかな」

そうとしか答えられない。いや、むしろ正解だろう。華だっこまでくると意地だけでやってるに違いない。

「え？ ただの気まぐれであんなに一生懸命に？」

「う、うん。華って変わってるから」

これも正論だ。

華は可奈が数えていただけでも三十回目の不時着を行うと、ちらりとこっちを見てきた。不機嫌そうな目で。遠くから叫んでいわく、

「可奈あ！ あんたも鉄棒部の一員なら、回りなさい！ あたし一人じゃ寂しいんだよお」

この時ばかりは華の軽率さを呪った。この台詞から片原くんは間違いなく華⇨変人⇨可奈の方程式を組み立てるだろう。予想通り、

「鉄棒部？」

と、呆気にとられたような顔で彼はつぶやいた。ああ、終わった、と可奈は目の前が真っ白になった。可奈にはもう戦うポケモンがないってか、ハハハ、と自虐的に笑ってしまう。が、

「逢坂さんも頑張ってるんだ。凄いなあ。目的は知らないけど、凄  
いよ」

片原くんは百万ワット（可奈主観）の輝きを放つ笑顔でおっしや  
った。可奈の目の前は今度はまったく逆の意味で真っ白になった。

「え？ 鉄棒だよ？ 女の子が鉄棒に夢中なんだよ？ 変じゃない  
の？」

当然の疑問を口にする、片原くんは柔らかな笑顔から、引き締ま  
った真面目な顔になる。

「何に全力を尽くすかが問題じゃない。全力を出せるかどうか、一  
生懸命やれるかどうかが問題なんだよ。それがなんであれ、他人に  
邪魔する権利はないし、しちゃいけない。頑張れるっていうのは、  
とっても凄いことだと僕は思うんだよ」

応援してるよ、と爽やかな笑顔。そして彼はタッタッタと駆けて  
いった。どうやら校庭をぐるぐるとマラソンみたいに回っているら  
しい。可奈はそれをぽーっとした顔で見送った。

「かーなー」

耳元で呪詛でも紡ぎそうな声。

「ひゃわっ…」

「ねえ、何度も呼んでるじゃん。可奈も鉄棒しようよ。ていつかさ、コッおせーて？」

「……いや」

さっきまでの弱々しい彼女はどこへいったのか、可奈は再び仏頂面になって華に言い放った。

「何度も言ってるじゃん。嫌だよ。だってダサイも」

『なににせよ、頑張ってる人ってカッコイイよね』

そこでさっきの彼の言葉が頭の中でリピートされた。

カッコイイよね

カッコイイよね…

カッコイイよね……（エコー）

「いや！」

可奈は立ち上がった。そして、猛然と鉄棒に向けて走っていく。

「行くぞ、華あ！ 目標は大車輪だ！」

「ええ？」

困惑する華を置いて、可奈はくるりと一回転した。その顔が微笑みをつくっていたのは、言うまでもない。

片原さんと初めて会ったのは一学期も始まってすぐのことだった。可奈はその日珍しく、華に用事があるというので、仕方なしに一人で下駄箱に向かっていたのだが、

「あゝ」

まだ廊下の途中で、思い出してしまった。机のなかに“あれ”を入れっぱなしにしてしまったことを。いや、もしかしたら机の上に置きっぱなしだったかもしれない。なんでだ私、と可奈は自分を叱責し、走りだした。あれだけは見られてはいけない。見られたりなんかしちゃったら、作り上げてきたクールでドライなキャラが一瞬にして崩れ去ってしまう。

獲物を追い掛けるチーターが如く物凄いスピードで廊下を駆け戻り、可奈は教室のドアを開けた。そして、鋭い眼光で自分の席を睨んだ。

やっぱり。

机の上にはぽつんと一つ、ペ・ヨンジュンのポロマイド下敷きが置かれていた。危ない危ない。皆帰っていたあとでよかった。多分、気付かれてはいないだろう。でなければ自分が大の韓流ドラマ好きだということが露見してしまうところだった。華にでさえこの趣味には『おばさんくさーい』と言われてるんだ。まともな人に見られたらどうなるか。

安堵し、机に近づいていく途中で 気付いた。じーっと自分を



見つめる視線があることに。油の切れた機械のようなぎこちない動きで振り向くと、一人の少年が机の上に座っている。確か……片原修吾くん。新入生女の子リサーチで、評価は確か中の上のちょいイケメンの男子だ。彼は他に誰もいないクラスルームのなかで、自分を穴があくほど見つめている。その時、可奈ははつきりと悟った。

死んだ（社会的に）。

きっと彼は穏やかそうな草食系男子的見た目とは裏腹に、腹黒いんだ。これをネタに自分を一生揺すり続けるつもりなんだ。元来ツッコミ担当で、相手に弱みを握られることに慣れていない可奈はごくりと息を飲んだ。……泣きそう。

「これ、君の？」

彼はまずそう言った。

「……………はい」

「これ、ペ・ヨンジュンだよね？」

「……………はい」

「好きなの？」

「……………はい」

段々と小さくなっていく可奈の声。やっぱりだ。こうやって痛み付けるつもりなんだ。いたぶるつもりなんだ。じわり、と涙が滲んできた。

「そっか……」

ひょいっと下敷きを指で掴み、じっと見つめる。

「僕も好きなんだ」

……。

……。

……は？

「彼って『冬のソナタ』で有名になった節が強いけど、『初恋』も捨て難いよね。知ってる？ あれって韓国の視聴率65、8%だったんだってさ」

可奈の目は点になった。『気持ち悪い！』くらいの罵声は覚悟していたため、本当に予想外だった。頭は上手く働かない。自分のことは棚にあげて、何言っちゃってるの、この人？と考える。けれども、口は正直だった。

「知ってる！ でも私は冬ソナが一番だと思うんだ。私もユジンになれたらなーって思いながら見てたの！」

「そう？ でもパク・ヨンハのほうが僕は好きかもしれない。あの誠実さは捨て難い」

「うん、わかるわかる。切ないよね！」

あれ、これって私？ そう可奈が自分自身を疑うほどに口からぼんぼんと言葉が飛び出した。本来饒舌というよりは寡黙なはずの自

分なのに、なんで頬を紅潮させながらこんな笑顔をつくっているんだろう。

「でも意外だな。逢坂さんが韓流ドラマ好きだったなんて。てつきりそういうのに偏見持つてる人かと思ったよ」

「へんけん？」

「ほら、こういうのって大体おばさんが好きなイメージがあるじゃん。僕たちみたいな高校生が見るようなものじゃない、って思われてるでしょ。日本ってそういうところがちっちゃいよね。何したって一人の趣味なのに」

前にそれについて嫌なことでもあったのが、片原くんは眉間にしわをよせてそう言った。

可奈も、心のなかで頷く。親の影響で物の見事にはまってしまった自分だが、それは華以外のどの友達にも言っていなかった。いや、言えなかった。言ったら変な子だと思われると思ったから。

でも、と片原くんは二カツと笑った。

「これからは逢坂さんに話せばいいね。なかなか同じ趣味を持つ人とであうのってないから」

「う、うん」

口ごもってしまうが、片原くんは特に嫌そうな顔をするわけでもなく、笑顔のまま「じゃ」と教室から出ていった。

可奈は机の上にぼつんと残された下敷きを掴み、しばらく突っ立っていた。

「ええ？ 可奈、どうしちゃったの？ 頭でも打っちゃったの？」

可奈はそう親友に心配されるほどに燃え盛る熱意をもって、鉄棒に挑んでいた。

握り、くるり、と一回転。ここまではほぼ百パーセントの確率でできる。問題はこの先。

大車輪。よく体操の選手らがやっている、あれだ。一時前におじいちゃんがそれでぐるんぐるん回っているようなCMもあった。だから一応可奈も自分も出来るのではないか、という錯覚に陥っていたのだが、

「ひゃんっ！」

現実はやっぱり厳しいとあうことだ。

可奈は普通一般の女の子。マツチヨでも、運動神経抜群というわけでもない。逆上がりが精一杯の女の子。んが、それでもやり遂げようとする。

先程あげた悲鳴とともに後方に大きく投げ出された可奈は、砂場に足からダイブ、そして転倒。じわりと涙。

そこに可奈は駆け寄り、眉を下げながら言った。

「ねえ可奈、どうしたの？ あんなに嫌がってたのに。保健室でも行く？」

「いいよ。私は」

一生懸命頑張れる人になりたい。あの人に見てもらったため、認めてもらったため。

「私は？」

「……………」

でもそれはあまりにも不純な動機だ。純粹に頑張っている華に申し訳ない。だから可奈はそれを口にせず、気になっていた別のことをつぶやいた。

「それよりさ。あそこで私たちのことじーっと見てるの誰？」

「あ、話逸らそーとしてる」

「いやいや、ホントに。見てみそ？」

「うん。……………って、可奈。あれは……………」

華はその正体に気付いたのだろう。アクションとしてがたがたと震え出す。

なにゆえ、と可奈が訝しんでいると、華はムツとした顔で可奈を見つめる。そして 木と木の間キラリと瞬く二つの瞳を指差した。

「アイサワカシナ  
相沢佳梓菜。現生徒会副会長だよ！」

「はあ……………？」

そんなこといわれたって、華が怯える理由がわからない。ただ副

会長が学校の敷地にいることに何の脅威があるのだろう。まあ、猫のように木の間に睨んでくる様は明らかに異常だけど。

「それがなにかあるの？」

サイレントプレッシャー

「無言重圧の佳梓菜だよ！ 別名、部活殺しの佳梓菜……！」

ひい！、と華は自らの体を抱く。可奈は突拍子もないあだ名と当の本人とを見比べて、首を傾げた。

「んな、大袈裟な」

「大袈裟ちゃうよ！ あの部活殺しの副会長が直々に来たってことはここをつぶしに来たんだよ。あの双眸に睨まれた部活は自らその看板を下ろしていくという」

「へえ……」

ふう、と切り替えのため息を一回、再び鉄棒と組み合おうとする。

「ねえ、可奈。そんな鉄棒やってる場合じゃないよ。私たちの部活がつぶされちゃうよ」

「何そんな心配してんの。大体さ。私たち部活にもなってないじゃん」

「あ……」

失念してましたよ、とでも言うように華は馬鹿のように大口を開

けた。

「そうじゃん。可奈天才！ 私たち部活じゃないからあの人のやってることはまるで無駄なわけだ！」

「そうそう」

適当な相槌を打ち、可奈はくるりつと、逆上がり。華はすっかり気分をよくして後ろから声援を送ってくる。が、

「むぎゅっ！」

可奈がこれから本番に挑む、というところで、後ろから鼠が猫に潰されたときのような（実際聞いたことはないが）音がした。きつとまた華が何かしたのだろうと振り返ると、華は戦闘不能になっていた。バタリ、と砂場にうつぶせに倒れるその頭上にはひよこがピヨピヨと回っている。

そして可奈はそれをやらかした人物の姿を見て、頬を引き攣らせた。

「げ」

「……」

サイレントプレッシャーとはこういうことか、と可奈はやっとこさ納得した。ただ相手は純粹無垢な瞳で見つめてくるだけ。だがそんな目で見られると確かに懺悔ざんげしたくなってくる。

とりあえず鉄棒から下りることを余儀なくされた可奈は着地し、眼前の華以上に小柄な少女を見つめ返した。

「……」

「……」

見つめ合う二人。本来なら能力差的に可奈が敗北しそうなものだが、今回において可奈の意気込みは違った。愛する彼のため（目下自分のため）負けられないもん！

互いに折れることなく睨み合いこと数分。先に口を開いたのは相手だった。

「……毎日放課後、奇妙なことをしているというのはあなたたちですか？」

蚊の鳴くよーな小さな声。可奈はその威風堂々とした態度とその声のギャップで、それまでの緊張が弾け飛んだのを感じた。……かわゆいかもしれん。

「……同好会申請は受け付けていません。私事で放課後の学校の備品をいじめることは許されていない。よってここからの立ち退きを命じます」

「はあ……」

随分回りくどい、言ってしまうばめんどくさい話し方をする子である。その間、表情がまったく変わらないもんだから、棒読み。可奈もとりあえず頷くしかなかった。

「……これからも活動したいというなら、三人以上の活動者を集めて、同好会として提出してください。この鉄棒を使っている部活動は今のところありませんから、それで承認されるでしょう」



「はあ」

「いっほど悪い人でもなさそうである。つまりは三人いればここを今まで通り使ってくれてもいいというし。」

「……三人？」

「可奈はまず華を指差した。そして、自分。あれ？」

「三人？」

「三人です」

「あれ、これってまずいんじゃない？ 自分と華、それで二人は確定だ。しかあし、三人目がいない。そもそも他に鉄棒部に入りたいなんていうやつはいるのか？」

「期間は……そうですね。三日にしましょう。それまでに生徒会の方に申請書を提出してください」

「そういつて佳梓菜さんは持っていたバツクから一枚の紙を取り出し、可奈に手渡した。そして、去っていく。」

「可奈は握らされた『同好会申請書』と、いまだに倒れている華を交互に見て、ため息をついた。」

案の定、とも言うべきか、可奈が頭を下げた知り合い達にはことごとく断れてしまった。

「ええ、やだよそんな部活」

「女の子がやるものじゃないよね」

「めんどくせーもん」

などなど。かつての自分が言った言葉がそのまま帰ってきた。それもそうだ。自分が相手の立場だったらそういうだろうし（実際に華に言ってたし）、いかがわしいものに青春を捧げるのもバカらしいだろう。

はあー、と重々しいため息ともに鉄棒へと赴く。しかし、自分の発するものよりも格段に重々しい空気がそこには広がっていた。

「……………」

「……………」

華が鉄棒を掴んでいる。その後ろ姿をじーっと見つめる佳梓菜さん。華は明らかに動揺しているようで額に汗なんかがかいてるし、佳梓菜さんは佳梓菜さんでポーカーフェイスを貫き華をじーっと見つめている。

これが噂の無言重圧の力かッ！、と納得せざるをえなかった。同時に部活殺しの異名も理解できた。

ともかくこれ以上空気を重くされてもなんなので、

「じゅんちゃん」

という掛け声とともに近づいていく。

目ざとく反応したのは華で、かつて前例を見ないスピードで可奈に近づくと抱き着いてきた。

「可奈あ……。あの人があたしをいじめるう。いじめかつこ悪いよお……………」

「まあ、うん。よしよし」

端から見る分にはただ佳梓菜さんが見学しているだけなのだが、やっぱり華には大きなダメージだったらしい。本当に涙を流しながら、

「だってあの人ただ見てるだけとかいって居座ってるんだもん」

「まあ、…………嘘はついてないね」

猫のようにそこに居座る彼女は確かに“ただ見てるだけ”だった。ただ、じーじーと見ているだけ。殺傷能力でもありそうな彼女の綺麗な瞳に見つめられ続けたら、普通の人間なら居心地悪くなくて当然だった。

「あの、まだ二日しか経ってませんけど……………」

このままいられても困る（主に華が）ので、可奈は怖ず怖ずと佳梓菜に言った。

「知ってる」

「……ならなんでここにいますか？」

「……」

押し黙る佳梓菜さん。可奈の肩に捕まって事の成り行きを見つめるだけの華。ただ相手の反応を待つ可奈。

「なんでそんなに一生懸命なのか、知りたいから」

ぼつり、いつもの調子でつぶやいた。

「え？」

「鉄棒なんてどうでもいいものになんで全力を注げるのかわからないから。……考えても考えてもわかんないだもん」

そういうと今まで肌色一色だった肌に赤みが注し、無表情だった彼女の顔はムスツとしたものになった。気付くとそういう佳梓菜の目の下には隈があり、今彼女の言ったことが真実ならば、一晚中考えていたということになる。

「ふふっ」

気付いたら笑みが漏れていた。

「何？」

「あ、いや。佳梓菜さんって可愛いなあ、と」

「……」

再び思案し出したように固まる佳梓菜さんを揺すって起こし、可奈は笑って言った。

「じゃあ、回ってみますか？」

「え？」

可奈は両手を振り上げてさも楽しそうな声で言う。

「一緒に回りましょう。回ればいろんなことがすかっとしますよ？それに一生懸命頑張ることはなんにせよ大事なんです！」

誰かさんの受け売りだけど、と心の内でつぶやいて、  
永い時を置いて、

「……そう？」

と佳梓菜さんは少し興味を示したような声を出した。ぶんぶんと可奈は首を縦に振る。

「じゃあ……一回だけ」

とことこ、鉄棒に向けて歩き始めた佳梓菜を見て、可奈は にやりつと笑った。

しめしめ。これで佳梓菜さんが鉄棒に興味を持ってくれれば会員は三人となり、同好会決定。自分は大車輪を回り、片原くんにアタアーツク！ふっへっへ、私って悪い子。

恋する乙女（多少の邪心あり）の瞳でニコニコしていると、後ろからブーイングがあがった。

「なに、可奈。あの人勧誘してんの？ あたしというものがありながら。きいーっ、うーわーきーもーのー」

「うるさいっ」

「耳元で騒ぐんじゃないの」

「だってえ」

耳元で騒がれて思わず耳を塞ぎ、可奈はぺちつと華の額を叩いた。そして、佳梓菜さんの様子を伺う。

「え？」

目をひんむいた。佳梓菜さんは回ってはいなかった。それどころか鉄棒を掴んでもいなかった。遙か彼方上空にある鉄の棒を寂しげな瞳で見つめ、ぼつり。

「届かない……」

その手は空を切っていた。

「ほら、佳奈あ。こうなっちゃうんだよあ」

翌日の放課後、華はとにかくブーたれていた。

「なにが」

可奈は本当に不思議な顔をした。まったく鈍感なんだから、と華はつぶやき、

「あの人は生徒会副会長だよ？ 生徒会の実質ナンバーツーだよ？ そんな人にあんな屈辱合わせたら癩癩どころじゃ済まないよ？ 部活どころかあたしたちまで潰されるかも……」

あわわ……と今にも泡を吹いて倒れそうな表情を浮かべ、かつくんと頭を垂れる。

「とにかくあたしたちは目をつけられましたから。次あったら礼儀を弁えなきゃね」

いやいつつも無礼なのはあなたでは、と可奈は言いたかったが、華らしくないその物言いに華の必死さが伝わってきた。が、やっぱりいまひとつ納得できない。

「佳梓菜さんってそんなに悪い人かなあ」

彼女は昨日、鉄棒に手が届かないとみるや、泣きそうな顔で飛び出してしまった。それゆえ華はこんなにも報復を恐れているわけなのだが、可奈はやはり首を捻ってしまう。

「だ、だって部活殺しの佳梓菜だよ？ あの無言重圧受けたでしょ？ あたしもう死にそで死にそで。ほら、心臓も破裂しそう……！」

ほらほら、と自信の胸を指差してくる華を華麗にスルーし、

「ただ無口なだけでしょ」

「むう。まあ、そうかもしれないね」

どうやら華を怒らせてしまったらしい。だが華のことだ。ものの数秒で機嫌はあつという間元の数値を上回るだろう。

「げ……」

華の機嫌も戻りつつあったとき。鉄棒のあたりにある人影を見て、華の動きは止まった。可奈もその視線を追ってみて、その理由を把握する。

そこには佳梓菜さんの小柄な体があった。手にはバケツが握られている。

「あ、あれであたしたちをフルボッコにするつもりなんだ……！」

と華はがたがた震える。何故バケツ？、と疑問を口にする前にも佳梓菜さんはバケツをひっくり返し、自身の両足をその底に乗せた。そして手を伸ばし、一言。

「届いた」

「ぶはあっ」



華は佳梓菜さんのそんな得意げな無表情に感服し、膝をついた。

「これが、巷で噂のクーデレの力か……！ 勝てないよお」

なんて言う。可奈も今回ばかりは全力で同意したかった。

「これで回れる」

足場が明らかに安定していないというのに、彼女は回ろうとしている。逆上がり。華がようやく成功しそうな、初級技。

「んっ！」

力を込め、一気に一回転　するつもりだったのだろうか。

「あり……」

腕が曲がっていない。足場の問題を置いておくとすれば、原因は明らかに彼女の腕力にあった。軽いはずの彼女の体を持ち上げるほども、彼女に筋力がないのだ。

「……」

黙する佳梓菜さん。目にはつつすらと涙。

「あ、あの……」

ダァーッシュ！

可奈が声をかけて近寄ろうとしたとき、佳梓菜さんは脱兎のごとく駆けていってその姿をくらませた。

後に残るのは、可奈と華とバケツ。

「潰されるう……」

華は泣きそうな声でつぶやいた。

三日経過。鉄棒同好会のメンバー、二人。

「はあ……」

可奈と華は二人、他に誰もいない屋上でため息をついた。

元々華の思い付きオンリーでつくられたものだったが、こうなると寂しい。特に可奈にしてみれば、片原くんと接点が無くなってしまうというのはやはり痛かった。自分の一生懸命を見てほしかった。

よく考えたらあれから一度も彼と口をきいていない。話そうと心掛けていたのに、いざ彼を前にすると口から何も発せられないのだ。そんなこんなで今、唯一彼と話せそうなものまで失いかけている。泣きそう。私の初恋があ……。

ツンとする華をもって青空を見上げる。初恋は実らないけど、こんなバットエンドはないよ、ぐすん。

鼻をすすったその時、キイツと音がして、屋上に繋がる唯一つの扉が開け放たれた。姿を見せたのは、小さい少女。

「佳梓菜さん……」

目についた水滴を慌てて拭い、可奈は立ち上がった。隣では華が口をアヒルのようにして佳梓菜さんを睨みつける。その目は明らかに最後の抵抗を試みようとしているものだった。

「なにしにきたんすかー？ ご覧のとおりあたしら御取り込み中なんでー。用ならまた今度にしてくださーい」

エアたばこを口元に寄せ、プハーと一息。何キヤラだよ。

でもそんな華のリトル不良をスルーして、佳梓菜さんは可奈と向かい合った。

「同好会申請は今日まででした。そして、確かに受理しました」

……。

「えい？」

不機嫌そうに顔を歪めていた華も、勿論可奈も素っ頓狂な声をあげた。

「ごそごそつと佳梓菜さんが懐から取り出したのは、一枚の紙。それを可奈に手渡すと、そそくさと彼女は後退。屋上の扉を開け、姿を消した。それを確認すると、可奈は渡されたものに目を落とす。」

同好会名 鉄棒部

メンバー

会長 逢坂可奈（一年）

「なんでよ」

「そこはいいよ。その下その下」

いつの間にか一緒になって覗き込んでいた華が言うつおり、目線をもう少し下にやってみる。

副会長 野崎華（一年）

相沢佳梓菜（一年）

確かに三人、揃っていた。でもこれってつまり……

「副会長様ああああツツツ！」

華が絶叫し、立ち上がる。その目にはすでに敵意のかけらもなく、ただただ尊敬の意志のみが伺えた。

「ってか……一年だったんだ」

副会長っていうから先輩かと思ってた。別のところに着目した可奈は自分が同級生に敬語を使っていたことに軽く後悔した。

## 回れGirls!

「佳梓菜あーん！」

隣のクラスで相沢佳梓菜の姿を見つけると、華は超スピードで駆け寄ってその小柄な体を抱きしめた。当人はさして困惑するわけもなく、冷静そのもので揺さぶられている。

「何？」

「何、じゃないでしょ。このカワイコちゃんめー！ ありがとねー」

「ああ……」

やっと自分が何故抱きしめられているのか理解したらしい佳梓菜は、納得の意志を首をカックンと縦に振ることで示した。

「で、何をするの？」

「何を……て？」

華は返答に口ごもる。可奈は横から口添えた。

「部活のことでしょ」

「ああ、ほら。くるくるーって回るんだよ。そう、ぐるーっと」

「……」と、佳梓菜。

「も、目標を大車輪にしてさ」

「……」

「し、知ってる？ 鉄棒の上からだね、世界が違って見えるんだよ？」

あ、それ私が言ったやつ。でも可奈は黙認してあげた。

「……」

両者サイレントすること数秒。無言重圧によって泣きを見たのは至極当然にも華の方だった。

「うわーん。可奈あ。やっぱり佳梓菜は苦手えー！」

敗北を認め、可奈の背後に逃げ込んだ。可奈はため息をつきつつも、親友の敵討ち（半分自滅だが）のために一歩前に踏み出す。

「大車輪、女の子でも出来るってことを皆に見せる。そうすれば、無理だと思って何かに足踏みしてる人の背中を押せると思う。そう、頑張る。頑張るってことはなんにしても大事なことなの。私は……頑張る人になりたい」

片原くんの受け売りをここでも使ってしまうとは。でも、確かにそう思う。今となっては可奈自身の思いだ。

佳梓菜はぼーっと半口開けて、握りこぶしを作った可奈のことを見つめた。え、なに？と可奈が決まり悪そうに拳を下ろすと、

「……すごい」

ぱちぱち、という拍手とともに称賛の言葉を頂いた。

「確かに女の子に大車輪は難しい……。いや、男の子でもできないでも、頑張る。うん、すごい」

言い終わると、佳梓菜は可奈の両手を掴んだ。

「私も、頑張る。きつと回ってみせる。私のために、誰かのために」

その瞳はとーっても輝いていて、可奈はうぐつと身を引いた。決して佳梓菜自身に引いたのではなく、彼女が眩しすぎたのである。言えない。副音声に『片原くんに見てもらいたいから』という不純な動機があつたなんて、言えない。ますます罪悪感で一杯になる。

「でも、私、逆上がりもできない。でも私、頑張るから。きつと回ってみせるから」

健気ッ！！ 可奈はその輝き瞬く双眸から目を背けた。悪しき自分はこの小さな天使に浄化されてしまっ……。しかし、自分よりもっと小さくて悪しき者が近くにいた。

「ふふーん。なーらあたしのが上だね。あたし、も少しで逆上がりできるもーん。べろべろばー！」

何故か佳梓菜に向けて対抗心、敵対心、その他諸々（殆ど黒い何か）を燃やす華はそっいつて舌を出した。が、

「子供」

さりげなく言われたたった一言で、華は撃沈した。

「あれ？ 増えてる」

その声を聞いた時、可奈はベンチから跳ね上がった。それまで規則的に動いていた心臓も、爆発するんじゃないかってほどに動きを活発にする。ちらり、と振り返ると、そこにはやっぱり、

「か、か片原くん……」

何故どもる、私。顔を真っ赤にしながら、可奈は自分のこういうとき役に立たないノミの心臓を責めたくなった。でも、彼はそんなことも意に介さず、

「や」

と片手をあげて挨拶してくれた。

「最近大会が近くってね。その練習がまったくきつくってきつくって」

「へ、へえ。そうなんだ」



なんだ、だからこっちにあんまり来てくれなかったんだ。可奈は安堵する。嫌われてたらどうしようかと思ってた。

片原さんの視線が自分の後ろに移ったようなので、自分も元の位地に戻った。

「三人……てことは同好会になったの？　すごいなあ」

「え、そう？」

おかしくないのかな、やっぱり。鉄棒同好会なんて。自分が言い出したから、引くに引けないのかな？　ごちゃごちゃ考えた可奈だったが、片原くんは力強く頷いていた。

「すごいよ。自分達で何かを作っちゃうなんて、すごい」

片原くんはもう一度頷くと、今鉄棒と取っ組み合っている二人を見つめた。

華はあと一センチそこらの差で回れずにいて、佳梓菜に至っては回るどころかただしがみついているだけだった。

「すごいよ。いいなあ。僕も入ろうかなあ」

「うん。……え？」

「大会終わったら考えようかな。逢坂さんはどう思う？」

「え、わ、私？」

テンパる可奈。もう急展開すぎて何がなんだかわからない！　だ、誰か通訳。



絶叫した。

え、なにこれ、大会を見に来てくださいますか？ これって、え？  
なに？ 脈ありってことですか？ な、なんなの。だって普通の  
人にこんなこと言わないよね？ 見に来てなんてさ。鉄棒のレベル  
アップ？ そ、それだけ？ もっと何かあるんじゃない？……？

可奈の頭脳はかつてないほどに回転、回転。最終的に処理できず  
にぶしゅーと煙を吹き始めた。

「じゃ、予定がなかったらでいいからさ、よろしくね！」

爽やかに笑って駆けていく片原くんを見送った。

「やったー！ 可奈、できたあ、回れたあ！」

背後から華の歓喜の声と駆け寄って来る音。華は可奈が立ち尽く  
しているのを見て、

「可奈？」

と首を捻った。

「どっしたの？ ……ん？ その紙何？」

「華！」

可奈は後ろからやってくる佳梓菜にも同様に、

「佳梓菜！」

輝きに満ちた顔で言った。

「日曜日、偵察に行くよ！」

そこにかつてのネガティブ可奈の姿はなかった。

日曜日。

「すごい……本格的だ」

佳梓菜はそうつぶやいて、先陣を切る可奈の後ろについていった。その可奈はといえば、猛然とした勢いであたりを見渡しながら歩いている。そんな二人の後ろをあくびをしながら、華が追い掛ける。

「ねえ、可奈あ。もう座ろうよお。なんでずっところころしてんのさあ」

三人はすでに大会の行われるスタジアムのなかに入っていた。地区予選だからか、客もまばらで席は腐るほど空いている。のに、可奈はずっと歩き回っているのだ。

「いい場所取らなくちゃしかたないでしょう」

「どこも一緒だよお。それにまだ朝の9時であたしまだ眠いんだよ

「お

「十分昼だよ。まあ、でもここいらでいいか」

ついた席は最前列。八百メートルトラックの曲がりのところ。鉄棒の真ん前だった。

「うし。なかなか」

と、満足げに可奈がつぶやけば、

「おお。そだね。見やすい！」

華が感嘆のため息をつき、

「ベストポジション。流石可奈」

佳梓菜がぼつりと言う。

三人は仲良く並んで座った。

「さて、と」

と言いながら可奈が取り出したのは従来のデジタルカメラ。華も佳梓菜もその登場に目を丸くした。

「あの可奈、これは……？」

「ん？ これってデジカメだけど？」

「じゃなくて。どうしてデジカメなんて持ってきたの？ 使うとこ

るなんてある？」

そう華に言われ、可奈は取り繕ったような笑顔を振り撒いた。

「ほ、ほら。回る瞬間を撮っておけばさ。これからに活かせるじゃん？」

ハハハ、と可奈らしくない笑顔をみせるも、華はジト目をやめない。額にシワを寄せて、睨んでくる睨んでくる。

元々華はこの偵察と称された催しに乗り気じゃなかった。華いわく、やりたいのは回ることであって、つまりはこれ以上他の人の回転を見てもしかたない、とそういいたいのだ。そんな華をなんとか説き伏せてやってきた手前、とりあえずは鉄棒に熱意のあるところを見せなければ。不審な行動はすなわち死（大袈裟）を意味する。ちなみに最初から一人で来るなんていう選択肢はなかった。

しかし反対に佳梓菜の説得は容易だった。元来素直な彼女はちょっと言葉巧に言い寄ればホイホイついてくるんだぜ、へっへ。あれ、……なんか私つてば悪役になってない？ 流石に我が儘に生きすぎたかもしれない。華や佳梓菜の貴重な休日を。

忙しい可奈はそんなこんなで少し気落ちし始めたのだが、

「あ、逢坂さん」

というたった一言でそんな気持ちは吹っ飛んだ。もう後ろなんか振り返って後悔している余裕はない。前に進むのみ！

「かつ、片原くん！」

グラウンドから声をかけてくれた人物に向けて手を振る。もうなんか華が不機嫌なこととか、佳梓菜が目を輝かせて辺りを見回しているなんてどーでもよくなった。ただ恋に生きるのみ！ 女の子はみんなそうなの、と自分自身すらも説伏させた。

「来てくれたんだ。……って別に僕の応援しに来たわけじゃないのにね」

いえ、あなたのため、それだけに来ました。と言えたらどれほど楽であろうか。でもいかんせん可奈は結構内弁慶であったりする。現状曖昧に笑って返すことしかできなかった。

「鉄棒は今からやる中距離のあとだからさ。もしよかったら僕の走りでも見ててよ。あ、他に用があつたら勿論そっち行ってね」

「は、はい！」

そう、すべては計画通り。鉄棒の前に中距離が入ることはわかっている。また、片原くんがそれに出場するという情報もクラスメイトから入手済み。だからこんな早くから来たのだ。そしてデジカメはそれらを捉える、いわば記録者。そう、全ては自分の思い通りに進んでいた。

片原くんが去っていくと、肩に重みがのしかかった。見ると、華がくーかーくーかーと寝息を立てている。

「起こしたらかわいそう」

隣からは佳梓菜が華を思いやる言葉をかけ、立ち上がる。やつぱライバル（可奈の勝手な解釈だが）といっても友情は生まれるんだなあ。しみじみとする可奈に、

「トイレ」

それをぶち壊す言葉を残し、佳梓菜は去っていった。もう少し優しく言ったらどうだろうか。女の子なんだから。

だがこれで我がシャッターを邪魔する者はいなくなった。可奈は邪悪に微笑み、カメラを構えた。

片原くんがスタートラインに立った。少し遠くにいる彼の姿をよく見ようと、可奈はデジカメの望遠機能をONにする。

デジカメのなかに映るのは、片原くんのマジ顔。やばい、かつこいい。憧れるう。……というのは話が進まないため横に置いといてと。

周りの選手たちもなんか屈強そうな人ばかりだ。少し痩せ型の片原くんが小さく見えるくらい。この予選は激戦区だから片原でも難しいかもよー、と友達が言っていたのを思い出す。え、もしかして片原くんピンチなの？ 可奈はそわそわと無意味に周りを見渡した。見えたのは華の幸せそうな寝顔おんりー。

いや、いくら自分がこんな遠くから心配したって、何の意味もない。可奈はただ応援するために、息を飲んだ。

とかなんとか一人でやっている間にも、彼らはもうスタートをき



る姿勢をとっていた。危ない危ない。中距離走とはいっても、短距離同様スタートは重要だ。もしここで躓けばすなわち敗北だろう。ぐつと気合いの込める選手たち。可奈も気を引き締めて見守った。

『いつについて』

係員さんの声。それから一拍置いて、拳銃の空砲があたりに鳴り響いた。と、同時に選手たちはスタートした。みんな、早い。あっという間に可奈の前を一陣の風の如く通り過ぎて、ゴールへと向かっていった。

「あー！」

しゃ、写真！ 慌てて構えたときにはもう遅い。その液晶画面には一番に走り終わり、笑っている片原くんの姿が映っていた。

「や、やったあ！」

少しばかり反応が遅れたが、可奈は声を張り上げた。写真にその凛々しい姿をおさめることには失敗したが、そんなことはどうでもいいくらいにテンションは上がっていた。

当の片原くんは「やったー、とガッツポーズをし、仲間たちとじゃれあっている。ああ、私もあんなかに入りたいッ、とは流石に思わなかったが、その姿を保存したいとは思った。別にばちはあたらね

「べー、とカメラを構え、画面を覗き込んだ。そして、シャッターを切

「え？」

目の景色が信じられず、可奈は口を阿呆のように開けた。

はつきり事実だと悟ったとき、思わず可奈は御父上様様から土下座までして借りてきたデジカメを取り落とした。

落下の衝撃で映りの悪くなったデジカメには、二人の男女が抱き合っている姿が映っていた。

う、うづうづう嘘だあ。可奈は昨日のことを思い出し、ベッドの中で震えていた。ガーン、と背景に文字が出てきそうな程に、その落ち込み具合は酷い。壊れたカメラを持って怒鳴り込んできた父も回れ右して出ていったほどだ。ひたすらにアパシー。無気力。もうだめ。ニートになっちゃう。

それもこれもつい前日に抱き合っていた二人のことが原因だ！。事前の調査で片原くんには彼女はいないって話だったのにい。それを友達から聞いたとき、どれほど恥ずかしかったことか。

とにかく落ち込む。ひたすらに落ち込む。もう前を向いて歩くなんてことはできないかもしれない……。それほどに可奈の受けたショックは強大なものであり、また、彼を想う気持ちも結構あったということだ。

あ、だめ。今そつちのこと考えると涙腺が崩壊する。

「可奈！。大丈夫？ お粥でもつくろーかー？」

めつたに学校を休まない我が子を心配して、階下からは母親の声  
が飛んでくる。

「いいー。ほつといてー」

鼻声になるのを精一杯に防ぎ、返す。下にいる母親がため息をついたような気がした。つきたいのはこっちじゃない。母も父も弟も、大事な家族のピンチだったのに労ってくんない。ぐすん。と、ネガティブな可奈は先程の母の言葉も忘れて、ベット内でぐずる。

数秒後、そこからは気持ち良さそうな寝息が立ち始めた。

ピンポーン。

ん。なんか聞こえた気がした。

ピンポーン。

うるさいな。なんですか。

ピンポーン。

なによ、もう。誰か出てよ。可奈はもぞもぞとベットから頭だけを出し、近くにあった目覚まし時計を見た。四時十二分三十六秒。父は仕事で、母はパートに出掛けているし、弟も部活。よってこの家には自分しかいないことを悟る。

ピンポーン。

「ああん、もう！」

こうなったら意地でも出たくなくなってくる。ぜ、絶対に出てなんかやらないんだから！ ツンデレ風味になってしまうのもひとえに頭が混乱しているからだ。なんかもう世界のすべてが敵なんじゃないかって錯覚に陥ってくる。ま、所詮八つ当たりですけどね。

「わ、私からは開けないんだからね。入りたければ入れればいいんだわ！」

他に誰もいないという開放感と、こんがらがる脳のせいで、いつもはしないようなことを頬を膨らませると同時に言ってみた。

……死ぬる。これ以上生き恥はさせない。

しかしチャイムは鳴らなくなっている。へっへー、ざまあみやがれい。とことん性悪となった可奈は謎の優越感に浸った。

が、とんとんとん、と何者かが階段を上ってくる音を聞いて、全身が総毛立った。

「ええ？」

泥棒さん？　もしかして私がツンデレ風に入ってきて来ることを促し

たのが聞こえちゃったの？ いや、母が鍵をかけ忘れたのかも。とにかく他人の侵入は否めなかった。

身の危険を察知して、可奈は後ずさる。壁と背中合わせになるまで後ずさった。や、やばい。

とんとん、と今度は扉が叩かれる音。り、律義な泥棒ですこと。可奈は緊張しきった頭でそんなことを考えた。そして、ドアが開かれる

「ハイ！ 華ちゃんだよー！」

ずるつ。現れたのは制服姿のハイテンションな親友。まあ、ね。こういうオチつてのは想像できてましたよ。可奈は弟の修学旅行のお土産である木刀に伸ばしかけていた手を止めた。

「お邪魔します」

その背後からは華とは違って礼儀をわきまえた佳梓菜が顔を出した。人の家に、隠してあった合鍵を使って侵入してくる華とは違い、お辞儀をする。うん、やっぱりいい子だ。

可奈は安堵のため息をつきながら、

「で、なに？」

と、心とは反対に冷たい調子で言った。

「何って、お見合いでしょ。可奈、昨日から具合悪そうだったじゃん。やっぱり風邪？」

コクコク、と佳梓菜は華に相槌を打つ。

そうなのだ。可奈は昨日、あの光景を目の当たりにしてから、一  
気に血の気が引き、トイレから帰ってきた佳梓菜と起き上がった華  
に驚かれ、家に運び込まれたのだ。一時は救急車がどうかの大騒  
ぎに発展もしたらしい。らしい、というのは幸運にも可奈はその時  
の記憶を失っている。ショックが大きすぎたみたい。

「で、大丈夫なの？ 可奈がいなかったから淋しかったよー」

びえーん、と自らの気持ちを擬音によって表し、華は（仮）病床  
の可奈に抱き着いた。その心底心配そうな顔にはいくら可奈でも申  
し訳なくなる。ぺこり、と素直に謝罪。

「心配かけて、ごめん。今日は来てくれてありがとうね。佳梓菜も、  
ありがとう」

「私たちは友達だから、当たり前」

佳梓菜のいつものポーカークーフェイスに親指立ちが追加され、可奈  
も知らず笑みが漏れる。華が眉根を下げながら、

「でも可奈本当に大丈夫？ まだ具合悪そうだけど」

「まあ、大丈夫」

可奈の顔は青い。まあ病気云々というよりは、精神的なものだけ  
じ。

「……やっぱり片原くん関係？」

「うん」

.....ん？

「んごえ！？」

一度は頷きかけたが、待て待て。ストップ止まれい！ 何故そのことを知っている我が幼なじみよ。誰にも言ったことは勿論ないし、そんな気持ちを態度に出したつもりもない（可奈主観）。なんでなんでなんで。幼い子供のように理由を求める言葉を脳内で連呼する。ただそうやって口を開閉しながらも、何も出来ずに真っ赤になった可奈を見て、華はため息をついた。

「やーっぱり」

「な、なんで？」

犯行を見破られた犯人が探偵に種明かしをねだるが如く、可奈は喉をカラツからにさせて尋ねる。ただただ困惑する犯人に、名探偵は告げた。

「何年幼なじみやってると思ってるの？ 可奈のことなら正直誰よりもわかってるつもりだよ。それに、可奈ってば本っ当にわかりやすい。あたしはもう可奈と片原くんが話してるところ見ただけでピコーンだったよ」

ふふん、と自慢げに胸を張る華。反対に可奈の顔は信号でいう“止まれ”から“通ってよし”の色へと急変した。トマトから青汁のように、急転直下。

え、つまり華はそれをずーっと前から知っていて、あえて今まで触れてこなかったってこと？ なのに私はこれまたずーっと知

るはずないって、たかをくくってたの？ ヤバイ、恥ずかしい。化粧してるとこ、弟に見られた時並に恥ずかしい。もうだめ、色んな羞恥から生きてけない。

「そ、そう。そうだよ、可奈」

隣で驚愕をその顔に貼付けたまま、知ったかぶって頷く佳梓菜は目に入らない。それよりも、

「知ってたなら……なんでついてきたの？」

要するに、華は可奈が片原くん目当てで陸上大会へ行こうと言ったこともわかっていたはずだ。なら、断つても良かったのに。というか断るべきでしょう。

「親友のことを応援しない子がどこにいるの？ 可奈ってば言ってもくれないし」

華に伝えなかったのは、おんりー羞恥心。だって実らなかったら格好悪いし、華に色恋沙汰の話をしたことなんてあんまないし……。

「あたしが余計なことでもすると思ったの？ ……だとしたら悲しいな。あたしはいつでも可奈の味方なのに」

後半もう少し愚痴が入っていたが、可奈の耳には届かなかった。

「うっ……」

可奈は意図的にじゃないにせよ、いつでも邪険に扱ってきたって



いうのに、華……。あんたって子は。ここ数年間、ドラマ以外で崩壊することのなかった涙腺が爆発した。

「ハナア！」

可奈は心友を抱きしめた。

涙で前が見えない。鼻水ずるずるう。こんにやろう、私をこんなにしてどうするつもりだあ。

決めた。もう私は素直な子になる。ツンデレなんて知らない。可奈は頷く。華のように、邪気も何もなく、相手を信じられるような子に

「うへへ……。計画通りい」

華はまるで黒いノートを持って世界を変えるだの言い出した新世界の神のように、笑った。めっちゃ嬉しそう。何故。……私が抱き着いてるから？

涙でなんか刹那で引っ込んだ。

「この、変態ッ！」

渾身のデコピンを見舞い、可奈は華から離れた。華は涙目になりつつも笑顔のまま言った。

「でも味方なのは本当だよ。応援してるのだ」

まあ、華は変態だがいい子じゃないわけでもなさそうでありながら実はそういうわけでもなくなさなく……。以下略。やっぱり素直になれない可奈はぶいっ、とそっぽをむいた。

「私も」

そして佳梓菜も賛同の意志を示してくれた。再び泣きそうになるのをぎりぎりで押し止める。

二人には秘密をつくる必要はないと思った。

可奈はすべてを吐露した。趣味のことで片原くと意気投合してそれから恋しているということも、鉄棒に献身的だったのはそれが理由だったということも、今気落ちしているのは片原くと知らない女子が抱き合っていたからだということも、ぜんぶ。

話し終えた可奈は自分の部屋の中だということに萎縮しきっていた。体育座りで、拳動不振。

だってだって、佳梓菜の前で一生懸命頑張る云々て言ったのに、それが嘘だったなんて。いや、結果は嘘じゃないけど、原因が問題なんだ。

隠し続けていた真実を白日の元に照らし、可奈は恐る恐る二人の方を向いた。

うわ。二人ともうーんなんて言って唸ってる。自分の行為の不純さについて呆れているんだ。きつと処罰について悩んでいるに違いない。確かに華が自分と同じことしたら、……どうするだろう。怒るのかな？ いや、それはいい。結果的に騙してたんだ。許されることじゃないもんね、と可奈はぐすん、鼻をすすった。

「軽蔑していいよ。私だって人間だもん。恋もするよ。女の子だもん」

うわ、私きも。と頭の冷静な部分がつぶやいてくる。でも、見捨ててほしくない。本当は軽蔑してほしくもない。

「だからさ……でもね……」

要領を得ない言い訳が口から零れ落ちる。自分の弱さを痛感した。一匹狼気取ってみたりもしたけど、こんなにも脆弱。

でも、

「何言ってるの、可奈」

この二人なら、自分を見捨てたりしないところかと思ってた。

「誰も可奈を軽蔑したりしないよ。ううん、むしろ尊敬する。だって可奈は誰かのために頑張ってたんでしょ？ あたしには真似できないもん」

華……。

「可奈は頑張ってるのは私たちが一番よく見てた。だから可奈がどれだけ思いを込めていたか、わかる。理由がどうこうじゃなくて、結果可奈は頑張った。それはやっぱり凄い」

佳梓菜……。

「それにさ。誰のために、何のために頑張ったって、頑張った可奈は可奈だけのものじゃん。胸張りなってる」

くっ。今日という日は厄日か何かなの。こんなにも涙腺がブレイクされそうになる日なんて、いまだかつてなかった。ライフポイントはゼロ。だけど、これから復活する。転んだままなんて、私のプライドが許さない。

ぶんぶんぶん、と頭を大仰に振って、ぱんぱんぱん、と頬を思いっきり叩く。そして、二人に全力で頭を下げた。

「ありがとう！」

ちーん、と鼻をかみ、ちり紙とともにネガティブ思考をごみ箱へポイ。滅却を確認すると、華に向き直った。

「で、どう思いますか？」

「へ、どう、とは？」

「私の思いです。まだ諦めておりませぬゆえ」

「んー……」

華は唸って腕を組む。可奈も、うーむ。なんだか勢いに任せて時代劇風に言ってみたが、華も自分同様、恋愛経験豊富で男なんてちよろいちよろい、ってタイプではない。むしろ逆だったり。そんな彼女に意見を求めるのは間違っているのか。可奈は真っ赤になって知恵を振り絞ろうとしている華を、多少憐憫の情を含んだ瞳で見つめ、

「佳梓菜さん」

くら替え。華がオーバーヒートして倒れ込んだのを確認すると、次はちびっ子クールビューティに意見を求める。華と違って大人っぽい佳梓菜の言葉ならば、説得力に申し分ない。

「まず、状況から整理しましょう」

おお、カッコイイ。熟練の恋愛エキスパートさながらの雰囲気醸し出している。

「まず、片原くんて誰？」

可奈はもうそれはひな壇芸人の如くずっこけた。もう、絶叫したい気分だ。さっきの威厳はどこに消えうせたのさあ。まあ、よくよく考えれば同じクラスの可奈と華はまだしも佳梓菜は面識がないのだった。

鉄棒のところにたまにくる男子、と伝えると、目を見開いて大袈裟に納得の意志を示す。今まで知ったかだったのか。華よりこっちのほうが子供っぽいと、可奈は思い始めた。

「私も恋愛はよくわからないけど……」

佳梓菜は優しい口調で言った。

「目に見えるものが真実とは限らない。こう、と決め付けるのは傲慢なだけ。きちんと聞いてみるのがいいと思う」

「……うん」

でも、怖い。それが真実だったら？ 諦めろって？ そんなあ。それに彼女でもないのにそんなこと聞けないって……。

「もう！」

現場復帰した華はがばつと起き上がり、開き直って言った。

「大体よく考えたら、可奈に好かれて嫌な人なんていないでしょう」

「あんたじゃないんだからさあ」

「ええ？ だって佳梓菜もそうでしょ？ 別に嫌じゃないよね」

相槌を打つ佳梓菜。そしてその瞬間、彼女は閃いたかのように目をぎらぎらさせて口を開いた。

「片原くんの好みは頑張ってる人！ だから頑張って大車輪をして、告白すればきっとメロメロになる！」

な、なにを根拠に。

「そうか、……そうだよ可奈！ きつとあたしたちはこのために回ってきたんだよ。回ろう！ そして世界を廻そう！ あたしたちが世界を動かすんだよ！」

「ちょ、ちよつと。話が大きくなりすぎ……」

「可奈ッ！」

バシッ、と布団を叩かれ、可奈は口を閉じる。

「可奈が告白して断る男なんていない。そして大車輪を成功させれ

ば、世界中の人はとりこになります！ 回ろっ！」

言っていることは無茶苦茶だが、華の目は輝いていた。同様に、佳梓菜も。一生懸命がカツコイイという片原くんの気持ちもわかった気がする。自分のことを一生懸命応援してくれる二人は発光していて、自分もこうなりたい、と素直に思わされた。

「うん！」

可奈は大きな声で応えた。

## 廻れGirls!

人々は常に回っている、ということとは自明の理である。地球は自転しているのだと、どこぞの天文学者だかなんだかが発見してしまった。ゆえにその自分たちが乗る地球が回っているのだから、自分たちだけ回っていない、なんてどの口が言えるだろうか。

また、人は廻る。周りの運命に囲まれながら、流されながら、回り、廻り、人は生きているのだ。回ることは人と切り離すことはできない。回るから世界があり、廻るから自分たちがいる。だから、私は回るのだ。

と。独特の理論を脳内に展開させて、可奈は時を待つ。鉄棒の前に仁王立ちし、時ならず人を待つ。

周りには誰もいない。華も佳梓菜も。

校舎の方を向くと、ちらほらと好奇の目が自分に向けられているのを知る。そのなかには多分、華も佳梓菜もいるんだろう。

ふんだ。見たけりゃあ、見るがいい。私の生き様を。拒みはしない。

人の前に立つて何かをやるような模範的生徒でも不良でもないことは自分で重々承知していた。が、特に嫌がるわけでもない。ただ、そういう場面にであわなかつただけ。

今の可奈は一人のヒトとして、挑戦しようとしているのだ。そのためにこの約一ヶ月無駄に頑張ったなあと、しみじみ。自分の痛々しい両手を見遣る。



馬鹿じゃね？

自身を嘲笑する声を、冷めた自分が出す。だが、そんな思いはたちまちに霧散した。

努力をすることの何が馬鹿なものか。努力もせずに安穩としたところから努力する者を卑下してばかりいるやつらに、高みへとたどり着くことは叶わない。すなわち、自分のどこかにいる弱い自分。過去の自分。

人を馬鹿にするだけ、自分の価値を下げているのだ。昔はまさに馬鹿だったなあ。

よし。

かれこれ5分間妄想ならぬ精神集中に勤しんでいるうちに、時は来たようだ。遠い校舎のところに、待ち人を認められたから。

気を引き締める。

これが今までの総結集。  
努力の集大成。

さあ、本番だ。

「でーけーなーいー」

「まあまあ」

そんな決意を胸に抱いて戦いに望んだ三日前。可奈はじたばたと

子供のようにな（今もだが）暴れ回る親友を慰めていた。

「まあまあ。そんな一朝一夕に出来るほど甘くはないよ」

「うえー」

華は自身の手についたマメを顔をしかめながら眺める。まあ、見ていて痛々しく、華が荒れるのも無理はないといえた。

「大丈夫？」

可奈は一応心配してみる。

この起源は元々といえば華の不用意な発言だ。可奈が申し訳なく思うことはない。けど、ここまでこの営みが継続されているのは、外ならぬ自分の責任だ。

頑張ることで片原くんに見てほしい、と身勝手に言ったのに、二人は嫌な顔一つせずに手伝ってくれる。なんていい子達なの。可奈、感動！ おっと自重。

「大丈夫だよ、こんなの。大体可奈の方が痛そうじゃん。大丈夫？」

まさか自分が心配される側に回るとは。

言われて可奈は自分の掌を見てみる。……なるほど確かにマメがつぶれて酷い具合になっている。

今までこんなことしたことなかったからなあ。女の子なのに。何してるんだろう。

……でも、後ろには引けない。それは可奈はある決意を固めていたから。

大車輪を成功させたら、告白する。回転しただけ。

後半のは冗談だが、これを心に誓った。ぶちまけてやろう、思いのたけを。

もしかしたら、片原くんは陰で笑っているかもしれない（ないと思うけど）。自分のボロボロで女の子らしからぬ掌を見て引くかもしれない（実際ありそう）。彼女がいるから、といって断られるかもしれない（濃厚）。

……しかあし。頑張った自分は自分だけのもの。どうなったって、努力した自分が変わらない。人に笑われるかもしれない。何してるんだ、って。だが、関係ない。それくらいの気持ちを抱いているのだ。笑われたくらいで止まってやるもんか。

「可奈。今めっちゃいい顔してるよ。抱き着きてえー」

華はにやりと笑って可奈に飛び付いた。

「許可してないぞー」と、可奈は半ば呆れ気味に華を引き離そうとする。

「いいじゃああああん。親友でしょおおおお」

押し返す度に語尾を延ばしてくるので、諦めた。なんか別のものも来たらしいし。

「抱き着きてえー」

感情の籠らぬ棒読みで同じ台詞をつぶやきながら、今度は佳梓菜がしがみついてきた。

なんだ、あんたら。そういう趣味の持ち主さんですか。否定はしないけども、巻き込むのはやみちくり……。まあ、冗談だけど。数秒もすると華は離れ、ニカッと笑う。快活な、見てて晴れ晴れするような笑顔だった。

「そんじゃもう一回転ぶちかますかあっ！」

「御意」

続いて佳梓菜。かつけーなー。

「よし！」

可奈も二人に続いて、鉄棒に臨んだ。

どんなものにも限界がある。

例えば、野球選手の投げる球がある一定の速度を越えられないように。例えば、陸上選手が一つのタイムを切れないように。

今、可奈はその類の壁にぶち当たったように感じていた。

一流でも越えられないほど大きすぎる壁ではない。他の多くの人が可能にしてきた所業だ。でも、可奈には高すぎる。ただの女の子には、高すぎる。

「できない……」

人に一つ一つある、限界。それがここ。私の限界。  
小刻みに震える自分の両手が語りかけてくる。

『やめよう。片原くんにだって彼女がいるもん。私がいくら頑張ったって、無意味なもんだよ。不毛そのものだよ』

「うるさい…」

言葉が一つ一つ絡み付いて、離れない。自分をがんじがらめにし  
て、下に引きずり落とそうとしている。捕らえられたら、復帰する  
のは不可能だ。なので、可奈は耳を塞ぐ。ぜーったいに、耳は貸さ  
ん。

でも。血だらけの手の平が直接耳に諭すのだ。

『やめよう』

そーだよ、もう！ 私だってやめたいんだよ！ だって痛いもん  
辛いもん女の子だもん汚れちゃうもん馬鹿らしいもん片原くんが振  
り向く確証なんてないもん付き合ってくれてる二人に申し訳ないも  
んもんもんもんもん。

でも、可奈は鉄棒を掴むのだ。

人が頑張るっていうのは、理屈じゃないのかもしれない。だ  
から、なんて理由をつけて頑張るんじゃないかって、それが人の本能。  
理由など関係なく、ただ、頑張る。すると明日が見える、未来が拓  
く、自分が見つかる。

可奈は回る。

一人の人間として。

逃げたりなんて、したくない。

「片原くん」

可奈は意中の相手が目の前にいるというのに、落ち着いた声で言った。同じく、大観衆の目前だというのに緊張した様子もなく、彼は口を開く。

「こんにちは、逢坂さん」

「うん」

「僕に用って何？ あんな誘い方は初めてだったんだけど」

言い、片原くんは苦笑する。少しばかり可奈の頬に赤みがさした。前日、可奈は大声で怒鳴ったのだ。教室内で。クラスメート見守るなか。テンションハイで。

『明日、鉄棒ンとこにきて！』

キャラが崩壊した瞬間（可奈主観）だったが、クールでドライなキャラなんて、これからの重要性に勝るものではない。可奈はそう

判断した。

そんな可奈らしからぬ挑戦宣言に、人から人へと波のように情報が広がっていき、今、野次馬という観客が遠巻きに見守る中、二人は向かい合う。

「片原くん」

「はい」

可奈のいつもと違う様子に気付いたのか、片原くんも真面目な顔で答える。

「今から大車輪を成功させます」

可奈は言った。真剣に。マジに。リアルに。常人なら、そんな可奈を馬鹿にすることはなくとも、心の中で憐れむだろう。頭どころか、みたいな。

しかし、片原くんはそんなことなしに、頷く。

「はい」

了承を得、可奈は移動して鉄棒を掴んだ。

冷たい。が、なんでだろう、心地よい。もう鉄棒なんかじゃなく、相棒と呼びたいところだ。それくらいにもう仲良しだもんねーははは。

でも、ゴメン。良い意味でも悪い意味でも、今日が最後だわ。成功しても、失敗しても、私はこれ以上頑張れないと思う。けど、任せてほしい。今日は今までで一番、誰よりも一番、頑張ってみせるから。そこから、また頑張れるようになりたい。今日までありがとう。また、どこかで会いましょう。

相棒に感謝と惜別の念を送り、可奈は大きく息をついた。  
そして、蹴る。  
すると、回る。  
きつと、廻る。  
人生が、変る。  
変えて見せる。

再度現実には甘くないってことを気付かされた。先日には成功していた大車輪だったのに、いざとなると上手くいかない、回れない。理由なんかわからない。強いてあげるなら、手が痛い。

可奈は段々焦躁から、涙目になってきた。あれ、なんなの？ 私は思いをぶつけるのもままならず、鉄棒とサヨナラもできないの？ 回数にして、十の失敗を積み重ねた時、可奈はもう半泣きだった。涙脆い、というか精神的に脆い自分が嫌になる。

さっきの決意表明にも関わらず……というかその決意表明がかえって重みとなり、可奈にプレッシャーを与えていた。成功させないと、と焦る程、動きは雑になっていき、体は縮こまる。もはや成功を見るのは厳しい状態である。

観客も同感だったのか、息を整えるついでに見てみると、大半が姿を消していた。薄情もん！

でも、目の前の人物は消えてない。確固たる意志を孕んだ瞳で、ただ自分を見つめてくる。止めようとはしない。ただ、見る。

いじめ？ ここにきたら抱きしめて、『もういいんだよ』でしょ。この赤い手が見えんのか。可奈はこういう時限定の乙女チックな妄想を発動させたが、そんなこと勿論起こりえない。



さらに、失敗を積み重ねる。もう成功は無理かと思えた。実際問題、可奈の心は折れていた。自信が過信だったことを思い知る。もう無理、もう頑張れない。でも。

「見てるから」

彼はそこにいた。呆れも落胆もしない。馬鹿な女だと罵りもしない。言うならば、成功を待っていてくれた。

「見てるから」

繰り返す。その目は語っていた。『できる』って。

可奈の瞳はそれに反して俯く。言い方は悪いが、そんなのただの憐憫だ。自分が可哀相になったから、声をかけただけ。

諦める？ ここまできて？ 逃げちゃうの？

やだ。けど……。

一度は壁を越えられたと思った。でもやっぱり無理だったのだ。こんなにボロボロになったけど。やっぱりあれが限界だった。無理してここまでできたのは、空想か、はたまたなんだったんだろう。とにかく、もう回れそうにない。

落ち込む可奈に、

「見てたから」

また、片原くんは繰り返す。

何度繰り返すのだろう。まったく女心をわかって……いや待って。一文字変わってないか。現在を指すものから、過去を指すものへと。

可奈はその言葉に俯きがちだった顔をあげた。相手は少しばかり  
恥ずかしそうに頬をかいている。顔を赤く染めて、自分を見られて  
いる。ううん、見てくれていた。前から。わかった。気付けた。

それだけだった。それだけが……可奈の心をもり立てる。力強く  
頷き、地を蹴る。今までとは明らかに違う蹴り。失敗なんて頭の片  
隅にも存在しない。宙を舞う。

そして。

世界は、廻った。

## 後のGirls!

「逢坂さん。早く」

「はい」

たった今、そんな声を掛け合つて、最近一番注目を集めているカップルが教室を出ていった。その後ろ姿を見て、野崎華はため息をつく。

「なーに、ハナカナの片割れ。嫉妬？ かつちよわるいぞー」

クラスメートの一人が声をかけてきたので、華は「違うよお」といつものように返す。

「ただちよつと悔しいだけ」

今、可奈は輝くような笑顔で教室を出ていった。心底嬉しそうにクールでドライじゃなかったのかい。本人に突っ込みたいけど、不在ゆえ、脳内補完。

本当の可奈はあんななんだったんだなあ……。なんで今まで知らなかったんだろう。あんな笑顔見たことないもんなあ。

「ま、ドンマイ。あんたもモテモテなんだから、男の一人でもつくりゃあいーじゃん。ダブデーとかすれば？」

「うーん。考えとく」

結構前に可奈にも同じことを聞かれた。その時は確かに必要ない  
と思ってた。実際あのまま馬鹿騒ぎしてたほうが楽しかったから。  
でも、もう戻れない。可奈は行ってしまった。自分も前に進まねば  
なるまい。

「……でもやつぱまだいや」

そんな気はさらさらないことを吐露した。

クラスメートはわかっていたようで、にやつと笑うと部活に出て  
いってしまった。あーあ、孤独。華は手持ちぶたさに髪をいじり始  
めた。

くるくるくるーなんてしていると、小さな待ち人來たる。片手を  
シュバツ。

「よっ」

「よ」

挨拶を交わし、佳梓菜はトコトコと近づいてきた。赤くなり始め  
た空を見ながら、口を開いてくる。

「部活、行く？」

「んー」

部活とは勿論鉄棒部のことだ。余談だが、あれから我らが鉄棒部  
はその名の通り、部活動に繰り上げとなった。それもこれも部員数  
が急増したためである。主に恋する乙女達。なんでも可奈が告白を  
成功させた話に尾がついて、伝説化したらしい話に食いついたって  
意中の人の前で回れたら、成功するなんて俗説が生まれたいらしい。

おかげで大規模な部になっちまった。まったくいい迷惑、と副部長はこねた。

「今日はいーや」

「今日も、でしょう」

「うーむ」

何かやる気が出ない。それは勿論、自分の下から（ちょっと誇張）可奈がいなくなってしまうことが主な原因だ。他にもいろいろとモヤモヤして。

なんで自分はあるなりに頑張っていたんだっけ。そもそもなんで回ろうなんて思ったんだっけ。大体回ろうと思わなければ、今も自分達は馬鹿騒ぎ出来ていたんじゃないのか。いや、そうすると別のなにかを頑張る頑張らないの話になり、……もうわかんね。

とりあえず自分がなんで頑張っていたかだけは放って置けそうにない。気になり、相変わらずの無表情でそこにいる佳梓菜に尋ねてみた。

「ねー佳梓菜」

「何？」

「佳梓菜はなんで回ってたの？」

佳梓菜はもともと緩慢だったその動きを止めた。考えるように、沈黙。しばらく置いて、

「多分」

と返ってきた。

「華と一緒に」

「ほーう」

つまりはただなんとなくで一生懸命だったんですか。

「頑張れる自分を見たかったから、かな。うーん。変えたかったから?。」

佳梓菜らしくなく、要領を得ない返答。それほどこの問いの難易度は高いってことかな。

「でも、私は変わったと思う」

そして、ニマーと笑う。いつも無表情だったくせに、心底幸せそうに笑う。不意をつかれた華が呆然とその表情を見つめ続けると、決まりが悪くなったのか、顔を赤らめ、背けた。

「とりあえず、私はもう少し頑張ろうと思う。男の子、ゲット」

可奈に感化されたのか、佳梓菜までそんなことを言う。さっきみたいな笑顔をちらつかせていれば、あつという間に釣れそうだけだなあ、華は思ったが、心の中に押し止めた。なんか言いたくなかった。

「佳梓菜」

「うん？」

「部活。あたしも行く」

まだよくわからないけど、頑張っているうちにわかってくるのだろうか。まあ、ぼーっとしてるよりは、マシかな。似合わないけど、新人いびりでもすっかー。

副部長二人は並んで教室を後にした。

「ああ、あれは姉ちゃんだよ」

最悪の事態を想定しながら、結構勇気を振り絞って出した質問の答えはそれだった。正直、拍子抜け。可奈はポーン然とする。

「お、お姉さま……？」

「うん。一つ上で陸上部のマネやってるんだ。……ああ、だからあの時帰っちゃったのか。目的の鉄棒の前になくなるからどうしたのかと思ってたんだよ」

いや。目的はあなただったため、一応完遂してます。とは、奥手な可奈は言えなかった。

二人して下校している途中、可奈は以前からずっと気にしていた、

陸上大会での抱き着いていた女の子について尋ねたのだが、答えは簡単明瞭。親族の方でした。ちゃんちゃん。

なーんだ、と胸を撫で下ろす。それだけを懸念していた可奈は本っ当に安堵した。これで障害は一つもナツシング。……でもそれが虚言だったら？　なんていう一抹の不安も浮かんではこない。浮かんでくるのは幸福おんりーです、すいません。

ニコツとして、二人を繋ぐ手を見る。まだ手の平の傷は癒えていない。けど、こうしている間に、いつの間にか治っているのだろう。彼は引くことなく、自身の手を握ってくれた。素直に、嬉しいっすなあ。

「へっへっへー」

脳天気な親友のような声を出し、可奈は青空を見上げる。

頑張ったから、今の自分がある。未来をつくるのは、運命でも、他人でもなく、自分自身。己の努力。それが未来を切り開くのだ。例えそれが望んだものでなくとも、自分で生み出した明日なんだ、後悔するはずもない。

なんて、散々きれいごとを抜かしましたが、ま、結局。

「グッジョブ、私」

そんな自分が好きになれた。

それだけで十分じゃないかな。

可奈は幸せを握った右手を、大きく振った。

回れ、人々。



廻れ、世界ー！  
なんつってー。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9305k/>

---

廻れ Girls!

2010年10月10日22時20分発行